

2024年6月2日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「くびきを共にする」

聖書：マルコによる福音書10：1～12

イエスは、「神が結び合わせてくださったものを人は離してはならない」（9節）と言う。離婚はだめだということだが、ここを読むと今の社会状況とはかけ離れた「教え」と言わざるを得ない。

ヨハネ福音書4章にサマリアの女性の話がある。離婚歴を複数持ち、人目を避けなければ生きていけない女性であった。井戸に水汲みに行く時も暑い真昼の時間に汲みに行く。苦しみを背負う女性にイエスは出会ってくださった。もし先ほどの律法のごとく、「離縁はしてはならない」立場にイエスがあるとしたら、この女性は罪人呼ばわりされたはずである。しかしイエスは律法で裁く立場に立たず、彼女の心の痛みの側に立たれた。慰めを与え、励ましと希望を与えられた。

ではイエスが「離婚はいけない」と言われたのは何故だったのか。ここは律法の解釈によって女性を意のままにモノとして扱うことが出来るかのように考えていたファリサイ派の人たちに対する発言であったとみる。イエスはその男たちに「神が引き合わせた者を、人は離してはならない」と言われたのは、言い換えれば「お前たちの身勝手な理屈でいたずらに女性を苦しめるようなことがあってはならない、離してはならない」ということだったのではないか。

そのあと弟子たちは、イエスの答えに納得できないものを感じたのか、さらにイエスに問うと「妻を離縁して他の女を妻にする者は、妻に対して姦通の罪を犯すことになる。夫を離縁して他の男を夫にする者も、姦通の罪を犯すことになる」（11,12節）。ここには当時としてはかなり大胆な男女の対等な主張が見られる。女性が男性の「持ち物」であった時代であって男性の姦淫は他の男性の妻、娘、すなわち男性の「持ち物」に手を出したという意味で窃盗罪レベルであった。その時代の中で「姦通の罪」だと言い放ち、男性の傲慢さを叱責し、石打の刑に値するのだと社会の在り方に、差別社会に怒りを表す。

イエスの言う神が「結び合わせる」とは、「くびきを共にする」とも言い換えられる。「くびき」は同じ荷物を対等に分け合うことであり、そのくびきに神が繋いでくださったのだとイエスは言っておられる。また、このことは何も夫婦の関係のみならず、あらゆる人間関係にも当てはまるもの。人間同士が互いに縛り、縛られる関係、支配し、支配される関係ではなく、一つの重荷を対等に分かち合い、助け合う関係に人はあるべきだということにもなる。

私たちの社会は、「くびきを共にする」社会とは到底言えない。キリストの差別社会に怒りを表されたことを大事な視座として捉える教会としたい。（神谷）